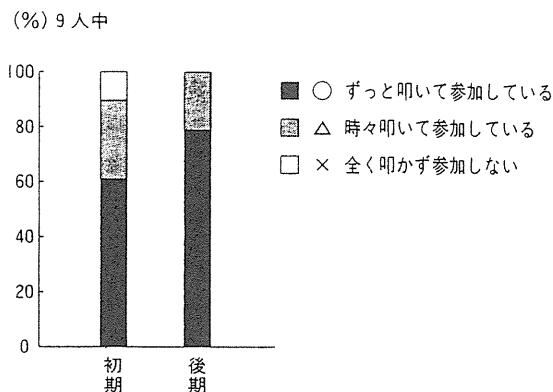


ものを隣どうしで一緒に叩きながら微笑んだりうなづいたりする、

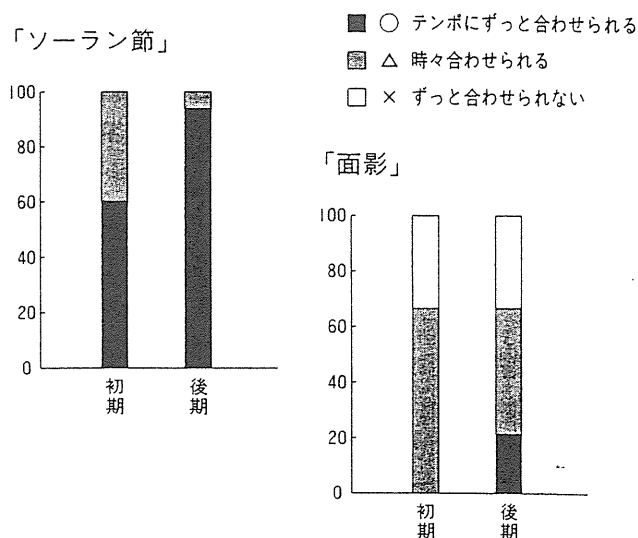
- (ウ)「叩き始める」「止める」「右手だけ」などの指示を聞いて、できない方をいたわる、注意する、
- (エ)特にテーブルドラムでは正面の方を見ながら、会話を楽しみながら小さなグループを意識する、などの行動が記録された。

## ②集中力について



全体的に初回から、ドラムに集中して参加している割合が高かった。スズではむしったり、放ったり、しまいこんだりしても、ドラムにおいては参加者全員が叩いて参加できるようになった。但し新しい曲を使用した時にはスティックを置いたりつまらなそうな表情をする方もいた。

## ③リズムの持続について



お年寄りの自由意志にまかせたので、当初は叩くという動作そのものに関心を示していたため個人差がみられた。けれども「ソーラン節」では、馴染みがあったせいか、頭打ち又は全拍打ちで曲のテンポ(♩=70)に合わせて最終的には94%の確率でリズム感を持続する

ことができた。メロディにあわせて叩いたり、歌いながら叩ける方もいた。「面影」(♩=65)については、新しい曲だったこと、3拍子だったこと、継続して行なわなかったことが要因でリズム感の持続は難しかった。

## ④テーブルドラムの導入について

人数は5名、一人2種類の音、合計10種の音を1度に楽しむことができる。また音源はアンプにつながっているため、音量調節が可能。そのため、手首のかたい、あるいは握力の弱いお年寄りでも指先を使って音がだせる。スピーカーがテーブル下に設置されているので、音の種類、音量によってはかなりの振動を身体に感じることができる。叩くところはテーブル上に色別、形別されてあるので、それに対する認知能力を確認することができた。音の違いも明確にわかるので、お年寄りの嗜好を調べることに役立った。それまで全く歌わずにいた男性が、それが難聴のためなのか、プライドがあつてのことなのかわからずにいたが、テーブルドラムの利用で音に対する好き嫌いの意志表示もはっきりし、唱歌の模倣、音を聴いてメロディーを口ずさむなどの反応が得られ、その方との関わりが容易になった。

## 3) 見学者に対する行動変化について

- ①中学生見学(体操着姿)の場合…評価対象者9名中2名が自ら見学者の方へ視線をむけたことが記録されていた他は見学者をむかえたことが要因で変化がみられた例はなかった。但し後半終了前約10分間、見学者にも共に参加してもらった時には手をつなぐ、目を見合わせて歌う、微笑むなどの表情に変化が多く記録された。

- ②社会人男性見学(背広姿)の場合…上記に示したような特別な変化は見られなかった。

今回、普段のセッティングや内容と同じ状況であったことや見学者数が少なかったことから人にみられていることを好むか好まないかということは明らかにされなかった。けれども、全く初めてでも世代を越えても、触れ合うきっかけをつくることで、お年寄りの社会的行動が促されることが再確認された。

- ③観桜会の場合…天候もよく、桜もほぼ満開という好条件の中で音楽プログラムは1時間行なわれた。音に誘われた花見客が足をとめ、中には踊る人、外国人も輪に入って手拍子されるとお年寄りの顔もほころんでいた。普段ではお互いに触れ合うことのない人達が自然に協和していた。

## 4) 肺機能における調査について

呼気量、肺の弾性を測るためにスパイロメーターを用い

て調査を試みた。結果、息を器具に吹き込む際、口をつぼめることができず息がもれてしまい、すべてにエラー判定が表れた。調査に参加した痴ほう性老人の場合、「口をつぼめる」ことが理解できなかった。代替できる器具あるいは調査方法を再度検討しなければいけないことが解った。\*療育音楽と肺機能報告書参照。(HMM Vol. 256, P.7)

その後、松吉医科器械製ミニライト・ピークフローメーターを用いて、最大呼気流量を検査するために、対象者5名を選び、療育音楽実施前後に測定を試みた。

実施日：3月30日(土)、4月5日(金)

測定値にある一定の傾向がみられなかったが、もう少し長い期間行なえば、効果判定ができる可能性があるのではないかと考える。

## 施設報告：

### 1. 変化と反応 「車イスからイスへ」

園がスタートしてから離床が声高に勧められた。来訪者の方から「こちらではよく元気で起きていらられる方がおられますね」と話される。しかし徘徊するという認識のない来訪者には「元気のよいお年寄り」と映ったのかも知れない。そこにタイミングよく音楽療法導入という話を契機に開始されて半年と覚えるが寮母の方から「車イスからイスへこの1時間だけでも無理なく座る訓練はどうだろうか」との提案がなされた。当初のビデオを観ると、長時間イスに座る事のなかつた方は、その場から徘徊が始まり集中して参加する事が無理な程で、職員の方も試行錯誤であった。次第に回を重ねる毎に利用者の方が目的意識を持ち始めた事に気づいた。「一堂に会して、何をするのだろうか」と、この苦痛から開放されて、イスに長時間座ることのなかつた方が楽しみの時間として受け入れたからに他ならない。これは無意識的、自然的なさりげない訓練(行為)によるものと思える。

### 2. 利用者と職員の係わり

それは音楽を通して利用者の方がその場に融け込んだからかも知れない。そこにはリードするミュージックボランティアの方と職員との三者の協調があり、音楽を媒体として一体になったからに他ならない。介護する者、介護される者といった一線を画することなく、日々楽しく生活を送って戴くことこそ園の理念である「お世話をさせて戴く」から外れまい。現場では、日々介護に追われ気づかないまま思いやる心(心のケア)を見失いがちであるが、人として日常生活を送る為には、優先して行なうべきではなからうか。先の4月11日(木)には観桜会が実施された。普段外出されない方も多く参加された事は記憶に新しい。

### 3. 音楽の持つ特異性

音楽を聞いていると心地よい。それを受け入れた時に限ってではあるが、決して嫌いな方はいない。「何故か、お年寄りは昔の事はよく覚えている」とよく耳にする。(医学的専門知識に触れずに考えた場合)

「昔はどうだった、こうだった」と話題にのぼる。従って、音楽の中に対話をちりばめることにより、情操を豊かに、且つ、如何に日々を楽しく暮らしたいという欲求・満足感・充実感といったものを長く保ち続けさせてあげられるかが主眼であり、その為の手段として用いられる音楽療法がそういう点では「音楽は共通した特異性を持つもの」と考えられる。その中には、上下肢運動の機能、拘縮改善訓練をも含む。

### 4. モデル事業の意義

観桜会に音楽療法を加味した事は特筆できるであろう。その場に参加できた喜びと、むしろ言葉はなくても阿吽の呼吸と言うべきか、何かその環境設定がそうさせるのか、その場その場の雰囲気(あつむい)がそうさせる。盛りあげられるものがそこにある。それに連られて何事かと第三者が遠まきに参加していた。

### 5. 必要性と認識 位置づけ、方向性

その人達に福祉事業というものがもっと身近にあり、「こういう事もするのか」という事をよりよく知って戴くのが目的であり、広く地域に根ざした福祉施設のあり方と、福祉ビジョンの一環として音楽療法を位置づけるならば、広義に痴呆性老人に限らず社会の一員として日常生活を有意義に過ごし易くする施設づくり、施設が取り組むべき課題でもある。

### 6. 今後の課題と助力

寝たきりの方とどのように関わって行けばよいのか。まだ在宅生活で平臥を余儀なくされている方も多くいる。これについては今後の福祉施設と行政に期待したい。介護だけでも日々の生活には事足りるのも事実ではあるが、日々を楽しく過ごせる福祉施設を利用者が選ぶ時代の波はすでに到来しているように予見させられる。

### 7. 最後に

従って、介護する(教える)ことは、まさに、学ぶ(教えられる)ことであると言えよう。

音楽担当 井上 榮



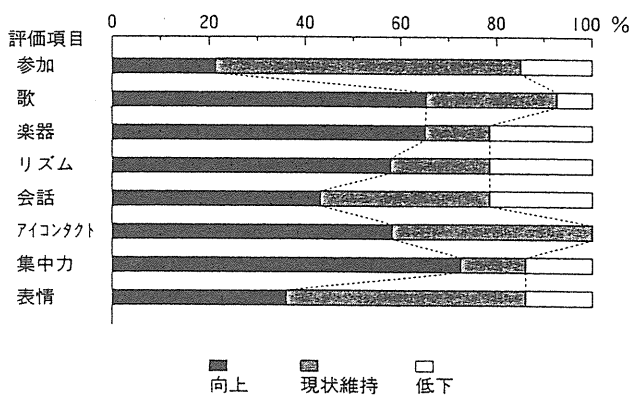
＜実施結果：施設（B）において＞

1) 全体的な変化

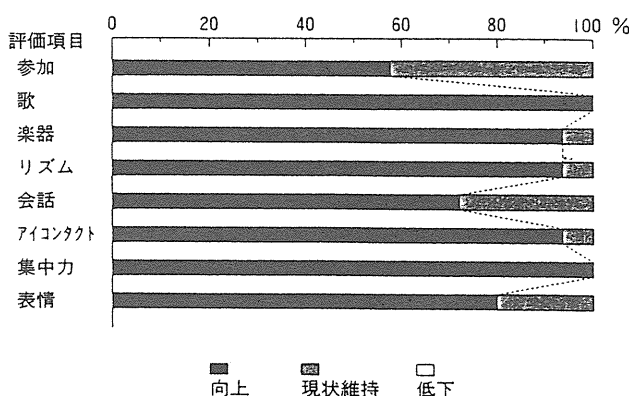
療育音楽評価表の尺度（HHM Vol.256, P.9）に従って、評価対象者14名における総合変化を比較したところ、最終的にすべての対象者に何らかの向上が見られ、各評価項目においては集中力、歌ともに著しい向上がみられた。これは前回の事業の結果にも同様の傾向がみられ、集中力においては早い時期に向上し、表現においては変化が表れるまで少し時間がかかることが分かった。全体的な変化の特徴として、当初はお年寄りの参加が遠慮がちで従順的であったと指導スタッフ側に受けとめられたが、「できるだけ自由に」参加できるように配慮を促すことにより、「痛い」「疲れた」と自ら主張する言葉が聞かれるようになったと同時に、「足を組みながら」「椅子に深く寄り掛かりながら」リラックスした姿勢で参加していた行動も多く記録されるようになった。

各評価項目における変化の人数割合  
(%) 14人中

(中間結果)



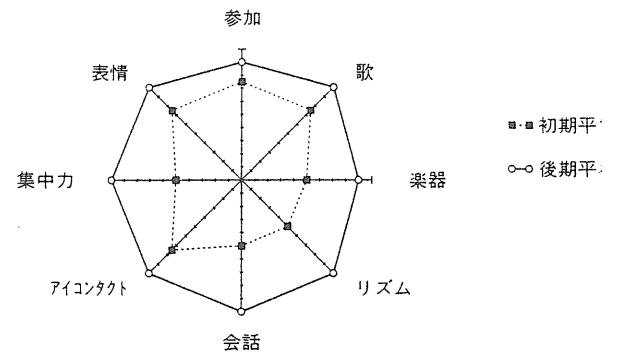
(最終結果)



2) 個人事例

① 個人的補助の継続が効果的だった例

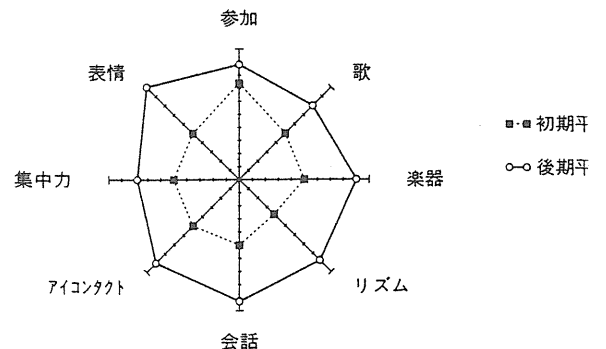
T.M.女性 69歳 重度痴呆



明るく朗らか、自己主張もできる方で、周囲の人と同じ事をさせないと機嫌を悪くされる時もたびたびあるとのこと。けれども言われたことに対してあまり理解できず、音楽療法に参加し始めた頃も楽器を持つことや手を打ち合わせる簡単な動作ができなかった。ただ、歌については知っていれば常に歌って参加していた。職員の補助で個人的な関わりを継続していくうちに自然に動作をまねて楽器を演奏、補助がなくてもスティックを自ら持ち、笑顔でドラムを奏するようになった。

② 自ら参加するきっかけを見いだした例

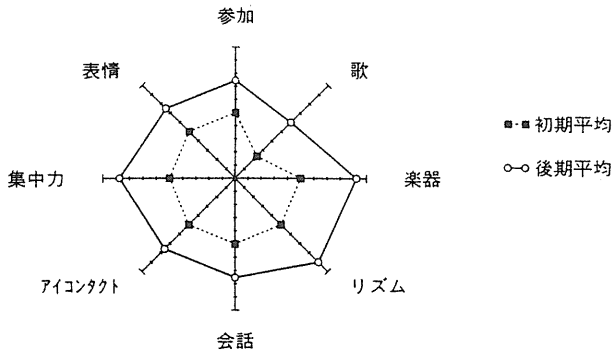
H.K.女性 73歳 重度痴呆



性格はとてもおだやかな方だが、社交性の面では時々応答する程度で、日常生活においても、いつも仲よくしている方につなげられてホールを歩いているらしく、音楽療法の時間中でも自分のひざをずっとさすっているだけで、自分からはどうしていいのかわからない様子で落ち着きがなく、自信なげな様子が常にみられていた。5回目のセッションで何度か手を打ち合わせることができたのをきっかけに、その後は隣の方と一緒にスネアドラムを叩けるように設定すると、スティックを握って自分から参加できるまでに至った。グループの中で模倣しやすい状況だったこと、繰り返し行われたことが参加するきっかけをつくったのではないかと考える。

③ 徘徊なく楽しみを見いだした例

T.Y.女性 85歳 重度痴呆



とにかく音楽の時だけは徘徊せずに座っていられることに驚いているという中間報告後も徘徊なしでの参加がひき続いた。以前は座っていても横をむいてしまうことが多かったが、馴染みのない曲を最初に導入した第6セッション以外は、童謡の「菟の鳥」「東京音頭」などを好んで歌うようになり、挨拶の歌では呼び掛けに対し「こんにちは」と言葉が返るようになった。楽器演奏の場でも周囲に合わせて、時には歌を口ずさみながら参加できるようになった。

3) 新しい歌の導入について

導入した曲

- 「イロハの唄」…第6セッションより 計4回
- 「今日を生きる」…第8セッションより 計2回
- 「こんにちは」…毎回 計9回

以上の曲について、評価表Iの評価基準(HHM, Vol. 256, P.4)に従って評価を行ない、14人中の平均をだした結果は以下の通り。また同様の内容で行なった事業施設(施設A)との比較を行なった。

	イロハの唄				今日を生きる		こんにちは	
	1回目	2回目	3回目	4回目	1回目	2回目	初期平均	後期平均
歌う意志	3.7	5.0	7.1	6.1	6.9	6.1	1.9	7.1
歌詞の正確さ	4.4	5.6	5.9	4.8	4.2	4.5	1.4	7.0

— 3曲とも、施設Aにおける最終平均より高い数値を示した。これは、歌におけるレベルが高いことを明らかにした。

— 「今日を生きる」の歌詞の正確さにおいては施設Aより低い数値を示している。セッションの中で導入された回数の少なかったことが要因と考える。

— 施設A同様に、歌う意志については初回の導入の程度によって、レベル的にバラつきを示していたものが、最

終的にはどの曲においても同じレベルまで向上できる可能性のあることがわかった。

— 「この曲、私知らないんです」と、今初めて歌った曲だということが理解できない方もいた。

— 2回目の導入時に、「これは、いつ習いましたか？」の問いに「昔、学校で」と発言する方あれば、「ちょっと前」と言って理解している方もいた。

— 「今日を生きる」は、歌詞を読み「生きるってことはすばらしい」「いい歌だねえ」と受けとめられていた。

4) ドラムの導入について

使用したドラム：

- バスドラム1、スネアドラム2
- パドルドラム8、ハンドドラム8

— これら4種類においてどのような嗜好の特徴が見られたかについて

バスドラム…1つしかないの、目立ちたい方/何人かで一緒に叩きたい方に好まれた。

スネアドラム…和太鼓を想像させるように、2本のスティックでふちを叩くなど変化を楽しみたい方に好まれた。

パドルドラム…多くの方が好んだ。小さいサイズの方が、軽量で持ちやすいためか、より好まれた。

ハンドドラム…手に持つ楽器としては少し重いのか、形のせいもちにくそうにしていることが多かった。

— 特記事項として

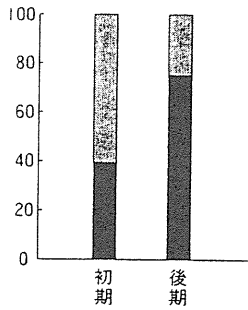
- (a) 楽器を渡したとたん、指示を待たずに叩き始める
- (b) リズムが速くなる傾向があり、強く叩く
- (c) メロディーをほとんど聴こうとせず、叩き続ける
- (d) ドラムの音が全体的に大きすぎて、スピーカーからの伴奏が聞き取れない時もあった

上記のように、お年寄りが高揚してくる様子が記録され、発散的効果を促すのではないかと考えられた。

— ドラムで参加している間の①交流、②集中力、③リズム感の持続における評価は施設Aと同様の評価基準を基に次のような結果を示した。

①交流について

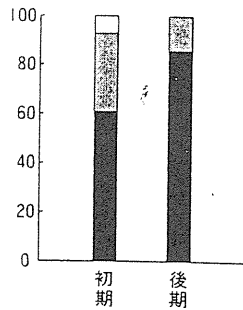
(%) 14人中



■ ○ 自ら交流する  
 ■ △ 受け身的に交流する  
 □ × 全く交流しない

②集中力について

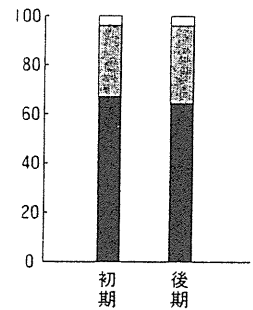
(%) 14人中



■ ○ ずっと叩いて参加している  
 ■ △ 時々叩いて参加している  
 □ × 全く叩かず参加しない

③リズムについて  
「ソーラン節」

(%) 14人中



■ ○ テンポにずっと合わせる  
 ■ △ 時々合わせられる  
 □ × ずっと合わせられない

その他：

- ①今までもすでに歌うことを楽しむ活動が定着していたため、前回の事業に参加した4施設と比較すると、個人的な補助がなくても自ら参加を楽しめるお年寄りが多かった。そのため、通常の療育音楽Bプロにとどまることなく、新しい歌を取り入れることも可能となった。
- ②常に音楽療法の始まる時間前に座って待っているため、予定より早く始める事が多く、結果的に60分より長く参加されていたことが可能だった。
- ③見学者、ビデオ撮影におけるマイナスの影響はなく、むしろ参加者の方から積極的に挨拶を交わす機会もなった。
- ④遠慮なく大きな音をだしやすい、トイレもルーム内にあって安心して参加できる、といった施設的设计、設備面に恵まれていた。
- ⑤日常での呼び名を音楽療法時にも利用することで親密度が増し、呼ばれたい愛称を自分から希望された方もあった。
- ⑥評価を行なうにあたって、職員側と指導者側のスタッフ間で数値上の見方に差がでてしまうことがあった。原因として、指導者側は対象者の日常生活を施設職員と同じ視点で熟知していないので普段との比較ができないこと、また職員側は音楽療法における観察記録が今回初めての経験であったことから、指導者と同じ視点で専門的に細かな点を評価につなげることが難しかったのではないかと考えられた。このことからミーテ

ィングを待つことによって、お互いの見解の統一ができることが再確認できた。

施設報告：

苑内での音楽教室、ルーム内でのレクリエーションでは歌う事のなかったお年寄りも療育音楽の時間になると全員が歌って、「疲れた」と言いながらも持ったことのない楽器を持って演奏し、普段見られない明るい笑顔になり、楽しそうで、とてもすばらしいと思いました。また新しい歌もすぐに覚え、この2ヶ月お年寄りにとっても、最高に楽しく、すばらしい期間だった事でしょう。

(個人状況)

M.H.

初回より積極的に参加し大変音楽に親しんでいる様子でした。楽しさのあまり、時々自分勝手なリズムになりがちでしたが、練習を重ねていく度に音楽のきまり、和というものを学び、向上していった様子でした。楽器に親しみ歌を歌っている時の笑顔はこの上なくすばらしく、この笑顔がいつまでも持続できたらと願っています。

A.A.

始めの頃はいねむりをしている場面も見受けられましたが、次第に楽器も正確に扱うことも覚え、歌も蚊の鳴くような声から、はっきりと他人に聞こえる声で歌えるようになりました。また笑顔も見られるようになり、音楽に親しんでいる様子も多々見受けられるようになりました。音楽を通し日々穏やかに楽しく時を過ごすなど心の育成が出来たなら大変嬉しく思います。

K.Y.

普段は明るさが見られないYさんですが、療育音楽の時間は楽しそうに歌い、リズムにのっている笑顔が見られよかったです。

M.S.

落ち着いていられない性格ですが、1時間みなさんと共に歌い、楽しんでいる姿が見られ、療育音楽の効果が良く感じられました。

K.M.

耳が聞こえないけれども、寮田より耳元でおしえてもらって歌い、腕が痛いと言いながらも楽器を持ってリズムをとり明るく楽しそうにしていた。

T.Y.

最初は、歌にも興味を示さないうえに楽器を持っていただくが口に持って行ってしまったり、寮田に手を持たれて動作をするが続かなかつたりしていました。でも少しずつ、寮田をみるだけで、一緒にリズムをとり始めるなど今まではない様子が見えました。

N.N.

始めるまでは興味を示さないけれども、楽器演奏をするとうち長時間でもリズムよく一生懸命太鼓を叩き、知っている歌があると歌って楽しそうでした。

K.K.

今まで行っていた音楽教室ではみられなかった楽器演奏(スズを使う)が上手にできていました。ストレスが解消されるのか、最近あまり怒らなくなってきたので、音楽療法の効果があったのかと思います。

C.H.

持続力がないようにみえましたが、太鼓を元気よく楽しそうに叩いているのがわかりました。

Z.Y.

今まで行っていた音楽教室では歌うことはなかったYさんが、この時間には歌い、楽器をもってリズムのついて、すばらしいと思います。

T.M.

Tさんにとって、療育音楽はなによりの時間であつたに違いない様子が見られました。楽器は思うようにならぬもリズムがとれなくても、昔の歌なら楽しんで歌っている笑顔がこの時間のすばらしさを語っています。

S.H.

歌は好きで東北民謡を得意とするも、感情の起伏が激し

く、気がのらないと歌いません。この時間内でもその感情のゆれがあつたものの、よく頑張っていました。

M.N.

いつも明るく笑顔でいますが、療育音楽の時間はそれ以上の明るさで楽しんでいました。

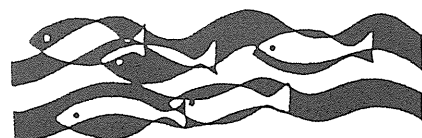
事業のまとめ：

今回の事業を通して次のようなことがわかった。

- ①このような刺激のある活動プログラムを楽しむことによって、新しいことにも興味を持てることがわかった。
- ②ひとりひとりに歌詞について質問することによりその答えから個人のレベルが判断でき、コミュニケーションのとり方が容易になった。
- ③個人評価をしていくことにより、個別性のある対応はグループ活動においても可能であった。
- ④グループでの活動は、お互い交流しあい自然に参加できる環境をつくりだすので、音楽を使ってひきだされるその人らしさ、心理状態、コミュニケーションの成り立ちをより活発にさせる効果があつた。
- ⑤プログラムの効果を判断するためには連続した評価が大切で、毎回評価することによって音楽療法中の行動の変化と日常生活における行動の変化が互いに影響し合っていることがわかった。

以上のことをふまえて、今後の課題を検討した。

今後も、施設スタッフの協力を得、客観的、具体的に老年寄りひとりひとりのニーズを把握できるように、ケアプランに基づいた個別目標と対応を考えたい。音楽療法では、意志疎通の難しいお年寄りに対し違った角度でコミュニケーションを容易にすることができる。楽しみながら安定した心理状態を保たせ、継続性のある活動の中で細かい認知能力、身体機能面での把握もできる。チームケアの確立を向上させるために、音楽療法としての専門領域の区別を明確にすることを今後の課題としていきたい。



# 埼玉県痴呆性老人の処遇向上モデル事業

## 中間報告

埼玉県認知症ケアネットワーク協議会

赤星直孝 加藤かゆき 小林純良 坂元直美  
田村 三宅宗子 (お問い合わせ先)

### 〈はじめに〉

老人ホームで生活するお年寄りの痴呆症状がますます重度化していく現状の中で、厚生省も具体的な処遇の検討にとり組み、様々な推進事業をすすめています。その処遇事業の一環として、埼玉県は療育音楽をモデル的に導入し、痴呆性老人の日常生活における活動性の低下を防げるか、また介護する側にとっても役立つものであるかなどその効果や今後の課題を検討するため、県内4施設の特別老人ホームにおいて事業助成を行いました。ここでは、昨年9月より始まったこの事業の中間報告を要約し、紹介します。

### 〈事業の目的〉

療育音楽が、老人ホームで生活する痴呆性老人の身体的、精神的、社会的活動にどのような影響を与えるか評価することを事業の目的として、以下のことを検討しました。

①高齢者の特徴とされている精神機能（主に集中力、表情、参加意欲面）の低下を軽減することができるか、また向上が可能かどうか。

②集団で行われる社会的な活動の中での役割、主に興味関心、社交性、自主性において向上がみられるかどうか。

その他、痴呆のお年寄りが記憶している歌について特徴をまとめ、くり返し毎回のレッスンで行うことによって、歌での参加に変化がみられるか、また習得し直接個人的に関わりを持たなくても楽しめるかどうか評価を行い、痴呆性老人の療育音楽プログラムのあり方について今後の課題を考えます。

### 〈対象者〉

TMVAでは、個人評価が行える人数として参加者は10名以下を望みましたが、それぞれの施設の意向を尊重して、対象者5名に対し1名の職員を増員するという条件で、施設A：13名 C：8名  
B：20名 D：15名  
計56名（男性11名、女性45名）

の参加者について実施しました。このうちの35名を評価する対象者としてしましたが、中間報告においては、2名が体調悪化のため一時欠席していたので、33名について全体的な変化をみました。

### 〈実施者〉

施設A：療育音楽講師1名、補助1名、職員3名  
施設B： // 1名、 // 1名、 // 4～5名  
施設C： // 1名、 // 1名、 // 1～2名  
施設D： // 1名、 // 1名、 // 3名

### 〈方法〉

療育音楽基本調査表や施設職員の方々からの情報をもとに個人の把握を行い、療育音楽Bプロとして、懐かしい曲を使って記憶の呼び戻しと話題作り、そして同じ刺激の繰り返しに対して反応をみるプログラムの組み立てを行いました。レッスンは毎週1回1時間行われ、各回のレッスン終了後に、療育音楽評価表を用いて個人の参加状態を評価し、指導者と職員の情報交換となるミーティングを設けました。事業の経過とレッスン内容については以下の示す通りです。

事業経過 (レッスンは計画期間から毎週1回継続的に行われる。)	
1	計画期間（指導1ヶ月目・1994年9月） ●基本調査をもとに対象者の把握/名簿作成 ●対象者との心のかような関係作り ●評価表についての把握、作成/個人目標の設定
2	実施期間（指導2～3ヶ月目・同年10～11月） ●レッスン、活動記録、個人評価継続
3	中間報告（指導4ヶ月目・同年12月）
4	実施期間（指導5～6ヶ月目・1995年1～2月） ●中間報告をもとに、必要に応じてプログラムの展開を行う。
5	最終報告（指導7ヶ月目・3月）

時間			
10分	導 入	かごめ うさぎ 通りゃんせ ずいずいっころばし	(雰田気づくり) ● 場所に集まるまでの準備時間を利用して、自然に音楽のあるグループに入っていける雰田気をつくる。 ● 音楽が聞こえ始めてきた時の対象者の反応をみる。
5分	あいさつ	こんにちは	(はじまりの認識) ● 一人ひとり名前を呼び(はじまり)の認識を促す。 ● アイコンタクトをとりながら、個人のその日の状態をうかがう。 ● 参加者の声をマイクで拡大して全員に聞こえるようにする。 ● 声のでない人も、動作で意思表示できるよう反応を待つ。 ● 歌として覚えていくかみる。
18分	歌とリズム (手)	うさぎとかめ 金太郎 浦島太郎 桃太郎 籠の鳥	(指先の刺激による脳の活性化と記憶の呼び戻し) ● 歌詞の先読み(指導者が歌詞を先に読んでリードすること)は、段階に 応じて行い、思いだしてもらおうようにする。 ● 曲にまつわる話で、参加者の問いかけに対する反応をひきだす。 ● グループとしての話の共通性をひきだす。 ● 選曲、テンポ、キーを留意しながら、歌しやすい状況をつくる。 ● 指示したリズムが、くり返し行うことによってとれるかどうかみる。
15分	歌とリズム (楽器)	<季節感のある曲> 9月—富士山 10月—船頭小唄 11月—たき火 12月—お正月 1月—雪やこんこ 2月—紀元節 ひなまつり 3月—さくら	(残存機能の維持、強化) ● 楽器を使いながら目、耳、手などを刺激する。と同時に、日常使われな い動作をとり入れて心身機能の活性化に役立てる。 ● 歌詞から連想できる動きを動作にとり入れる。 ● はじめは、多少の動きでも音のでやすいスズを使用し、やさしいVパター ンで行う。 ● 合奏する楽しさを体験してもらう。
15分	歌とリズム (シェーカー)	<民謡など 高揚を促すもの> 船頭小唄 ソーラン節 炭釜節 花笠音頭 黒田節 荒城の月 大桶公 東京音頭	(リズム感のとり戻しと自己発散) ● 持ちやすく、振りやすい、音のでやすいシェーカーを作成する。 ● 力をぬいて自然にリズムがとれるように促す。 ● 振動の大きいフロアタムや太鼓を使用してリズムが感じやすい状況をつ くる。
7分	終 了	夕焼け小焼け さよなら	(おわりの認識) ● 安らぎと落ち着ける状況をつくる。 ● とりのりと手をつなぎ、ぬくもりを感じ合う。 ● 一人ひとり手をとって、レッスンでの状況をふり返って声をかけ、終わ りの認識を促す。 ● 次回また行うことなど伝える。



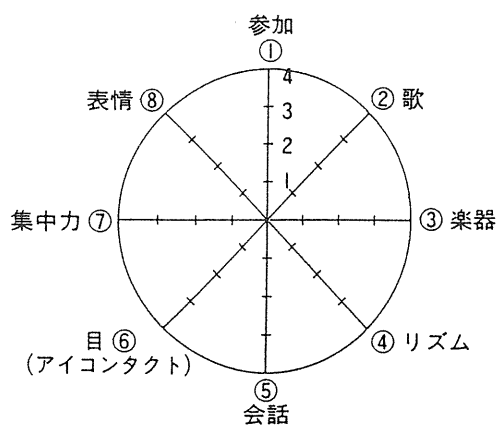
## 〈評価方法〉

評価は、朝日新聞厚生文化事業団の制作による「痴呆性老人編」ビデオガイドブックにある評価表を参考、訂正し、以下の8項目について変化を調べました。また、円形グラフに示した時、結ばれた線内の大きさと興味関心、社交性、自主性の向上が比較できるように項目内容の段階を示しました。

- ①参加
  - 4 自分から参加する
  - 3 よびかけられれば参加する
  - 2 しぶしぶだが参加する
  - 1 参加しようとしらない
- ②歌
  - 4 新しい歌を歌える
  - 3 知っている歌、好きな歌なら積極的に歌う
  - 2 時々、歌おうとする姿勢はみられる
  - 1 ほとんど歌おうとしらない
- ③楽器
  - 4 動作をまねて演奏できる
  - 3 まねることはできないが演奏している
  - 2 演奏することはできないが持っている
  - 1 楽器を持たない
- ④リズム
  - 4 指示した通りリズムがとれる
  - 3 指示した通りではないがリズムがとれる
  - 2 時々、とれたりとれなかったりする
  - 1 リズムをとらない
- ⑤会話
  - 4 会話ができる
  - 3 時々会話する
  - 2 声をだすが会話にならない
  - 1 会話を試みない

## 痴呆性老人に対する療育音楽評価表 例

精神面→行動面



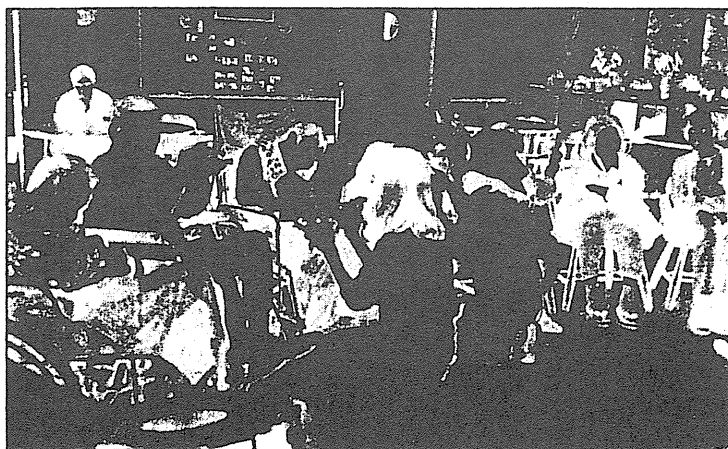
- ⑥目 (アイコンタクト)
  - 4 目で交流できる(アイコンタクトがとれる)
  - 3 時々目が合い反応する
  - 2 目は動くが反応とまではいえない
  - 1 反応がない
- ⑦集中力
  - 4 ものごとに集中できる(1時間ずっと)
  - 3 時々、集中できる(40分以上)
  - 2 集中がない(20分以下)
  - 1 全く集中できない
- ⑧表情
  - 4 常に明るく生き生きしている
  - 3 声かけにより、望ましい表情の変化が増す
  - 2 変化に乏しい
  - 1 無表情である

## 〈個人事例〉

### ① S.M. 女性 60歳

#### 積極的な参加と同時に会話が増えた例

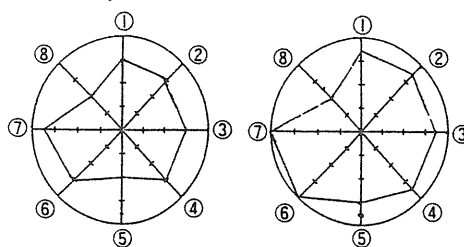
神経質な面があり、常に何かを気にしていることが多く、それがひどくなると自傷行為におよぶとのこと。療育音楽では初回のみ自傷行為がみられましたが、その後の情緒が安定しています。ある時は療育音楽指導者を見かけるなり、「ももたろうさん～」と唄いだすなど、この時間を楽しみにするようになっていきます。質問に対しては指名をしなくても答えるなど自発的行動の変化がみられ、歌においては毎回ほぼ全曲唄って積極的に参加している状況です。この療法が始まるまでは、日常生活において、自分から唄いだすということは職員間で記憶にな



いとのこと。最近では突然自分から唄いだしたり、機嫌が悪い時でも、職員が唄いかけるとまねして唄ってくれて、少し機嫌がよくなったように感じることもあるそうで、入所当時と比べて、精神的にも身体的にもレベルが少しずつ低下している中で、このような状況を見出していると報告されました。

初期の頃の平均

その後の平均



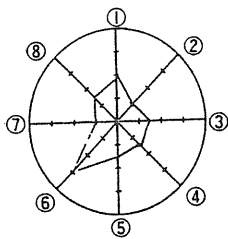
### ② S.M. 女性 60歳

#### 興味をひきだすことのできた例

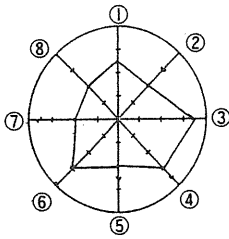
療育音楽基本調査において、「音楽は関心なし」と判断されていました。高度な難聴のため、本人なりの参加が見出せずにいたのです。療育音楽が始まったころは、興

奮ぎみで独語が多く、大切なバッグを抱えたまま、ずっと組みをしている状態が続いていました。何を言っても聞かない、おやつや牛乳をだしても拒否するといったこともあり、一時はグループから外すことも考えていました。ある時、バッグを椅子のわきに掛けMTスズを振る行為をまねする（目はよくみえる）という所からそれを突破口に、今は席を立てて帰ろうとすることもなく、11月にはいつ、歌を唄いだしたり、終了後も比較的穏やかに過ごしているとのこと。以前は、腕組みをといった回数が記録されていましたが、その時間が長くなっているため、現在は腕組みをとして楽器で参加している割合を記録しています。普段は腕組みをして目をつぶっていることが多い中、この時間はこのような変化が見られてきているので、他の参加者の影響も考えて、何とかよりうまくとけこめるような方法を、現在スタッフ一同試行錯誤を繰り返している状況です。

初期の頃の平均



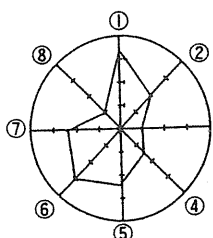
その後の平均



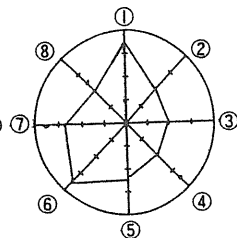
③ **状況の把握ができるようになった例**

療育音楽基本調査段階では、「普段、座ったままテレビなどを聞いて独語していることが多い。また関心を示さないことが多く、社交性においては交流できない。」とされていました。日常生活においてはスプーンを持つこともなく、食事は全介助でおこなわれています。療育音楽が始まって1ヶ月程たった頃、突然MTスズを握るようになり、その後は療育音楽の中で必ず一度は握り、音楽をしているという状況の把握ができるようになってきました。11月中頃から、かすかにですが、「握る」こともあり、スズを持つことに対する目的を意識しつつあるようです。眠そうな時が多いけれども、さそいかければ嫌がらずに唄っています。

初期の頃の平均



その後の平均

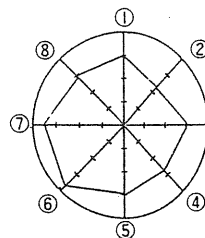


④ **音楽中にみられる姿勢が日常動作に結びついた例**

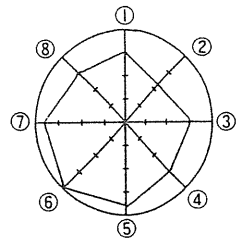
音楽中にみられる姿勢が日常動作に結びついた例

無口でおとなしい性格で、自分から人に話しかけることはほとんどなく、また演奏会などがあっても興味のない時はすぐに席を離れ、興味関心においては「全く関心を示さない」と報告されています（療育音楽基本調査より）。一日中徘徊しているとのことですが、療育音楽の時間はまだ一度も離れたことがありません。以前はうつむいていることが多かったのですが、最近顔をあげて参加しています。廊下を歩く時にも姿勢がよくなり、職員の声掛けに笑顔で返してくれるようになったと報告されました。

初期の頃の平均



その後の平均

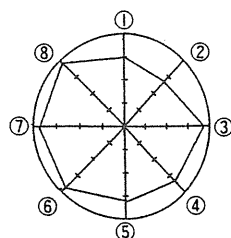


⑤ **コミュニケーションが活発になった例**

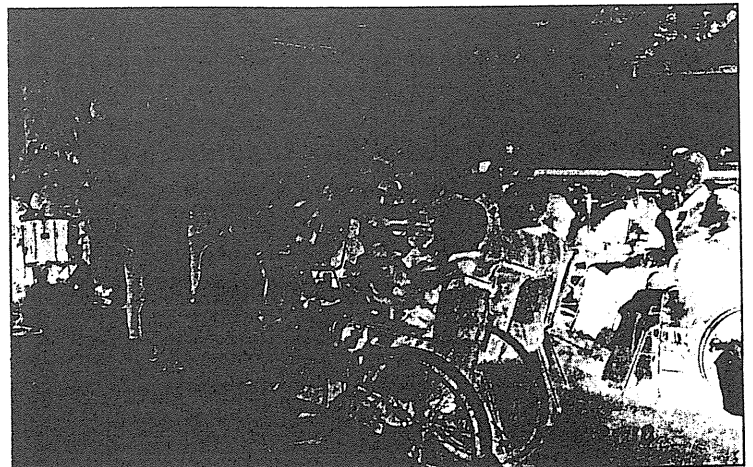
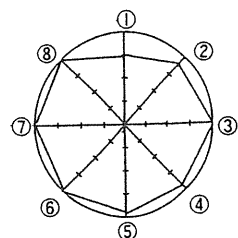
コミュニケーションが活発になった例

以前は話しかけるとなずく程度でしたが、レッスン中自ら歌う、体を動かすなど積極的な参加が見られるようになったと同時に、最近は話しかけに時々言葉ではつきり受け答えができるようになってきました。

初期の頃の平均



その後の平均

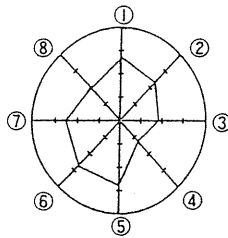


⑥ **言葉表現での変化がみられた例**

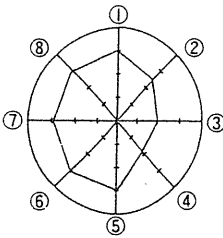
言葉表現での変化がみられた例

言語理解／表現において判断不可と報告されていましたが、「船頭小唄」「黒田節」など歌い、新しい歌（さよならの歌）にも関われば口ずさむようになり、話しかけにははっきりと返答してくれるようになっていました。日常生活でも意味不明瞭ですがおしゃべりになってきているそうです。今後、音楽に参加する中で、こちらの指示がどのような時に、あるいはどの程度理解できるようになるか変化をみていきたいと思えます。

初期の頃の平均



その後の平均



⑦ **集中力の向上がみられた例**

集中力の向上がみられた例

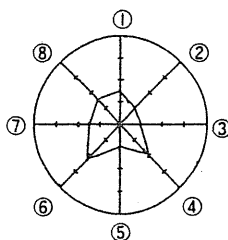
10月までは、レッスン中自分からは顔を上げずにうつむいて口も閉じたまま、周囲が楽しそうに唄ったり合奏していても無関心。呼びかけには、かすかに無表情の顔を上げて、すぐうつむいて床を見つめているだけでした。それが回を重ねるごとに顔をあげる時間が長くなり、曲にあわせてうなずいたり、集中力が向上しています。また指先で拍子をとったりするようになり、指示を理解し受けとめるようになっていました。11月末には、今まで全く唄わなかった状況から、「うさぎとかめ」の歌詞を口ずさむようになり、笑顔もふえ、瞬間的ではあっても、MTスズを振って、徐々にグループに加わるようになっていきます。

レッスン中顔を上げて参加していた平均時間：

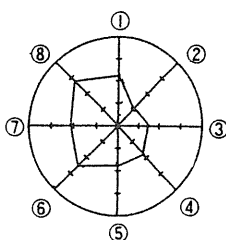
10月—5分

11月—15分

初期の頃の平均



その後の平均

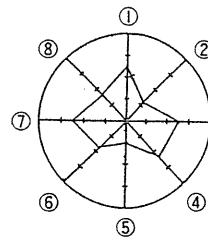


⑧ **楽器やリズムでの参加を通して集中力が向上した例**

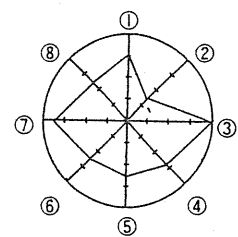
楽器やリズムでの参加を通して集中力が向上した例

療育音楽が始まった頃は、黙り込んで気むずかしい一面もあり、目を閉じて寝た振りをしているうちに、本当の睡眠状態に入ってしまう、プログラム終了で目覚めることがしばしばありました。最近では、目線こそあわせませんが、曲に合わせて体をゆすったり、MTスズを指示どおりに振ったりと、どちらかという身体の積極的な参加がみられるようになってきました。10月半ばより覚醒して参加している状態が続いています。

初期の頃の平均



その後の平均

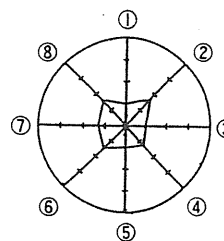


⑨ **くりかえしの活動を通して情緒の安定がみられた例**

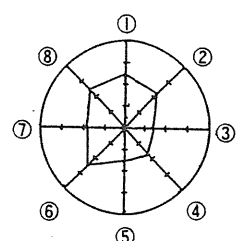
くりかえしの活動を通して情緒の安定がみられた例

日常生活の中では、絶えず落ち着きがなく、歩き廻っては他の人にちょっかいを出すため、施設内でもトラブルが多いとのこと。管理されることを嫌い、気のむかない時に介助されると暴力的行為に走ることもあるそうです。レッスン後半に、楽器やシェーカーで演奏する場面では、振るといふよりスズの玉をむしり取ったり、シェーカーをこわして、中の小豆を床にまいたりすることに熱中していたのでした。それをちょっとでも制止しようものなら、怒って席を立ち戻ってはきませんでした。ただ歌は好きで、スズやシェーカーをこわしながらも唄っていることが多くなってきました。そして園内にBGMとしていつも流れている有線放送には耳も傾けないのに、おとぎ話のメロディーが流れた時は徘徊をやめて、近くの椅子に腰掛けて聞いていたと職員からの報告がありました。

初期の頃の平均



その後の平均



## 〈全体的な成果〉

10月4回の平均を初期の評価とし、11月4回をその後の変化として、評価対象者33名における変化をみた結果、全体の60%が向上、24%が現状維持、16%が低下を示す結果となりました。向上を示したものとして、集中力が最も高く70%。徘徊のひどい方がレッスン中の1時間座っていられるようになったり、懐かしい歌や楽しいふれあいを通じて参加しているうちに、対象者それぞれに内在されていた興味関心をよりひきだせることができた結果であると言えるでしょう。

## 評価対象者33名における変化

項目	向上	現状維持	低下
集中力	55% (18)	42% (14)	3% (1)
1時間座れる	64% (21)	18% (6)	18% (6)
徘徊のひどい方が1時間座れる	64% (21)	18% (6)	27% (6)
興味関心をひきだせる	52% (17)	21% (7)	27% (9)
集中力が最も高い	58% (19)	21% (7)	21% (7)
1時間座れる	67% (22)	21% (7)	12% (4)
興味関心をひきだせる	70% (23)	15% (5)	15% (5)
集中力が最も高い	49% (16)	36% (12)	15% (5)
全体	60%	24%	16%

## （その他施設からの報告より）

- 職員と入居者のコミュニケーションを深める点において、じっくり関われる時間が持た。
- 1時間継続して座位を保っている。
- 普段の生活ではみることのできない個人の可能性を見出せた。
- 入居者の楽しみとなっている。

## 〈諸問題〉

療育音楽の中でみられる変化が必ずしも生活上の問題行動の変化として、すべて顕著に表れるものではないために、対象者の変化において、指導者側と施設職員側との視点が違う場合があります。また、プログラムの効果をはかるためには客観的な評価が求められ、そのように行っていますが、評価対象外の反応がみられたり評価しづらい状況があったり、数値のみの結果で個人の変化を表しきれない部分があるとの報告もあります（特記事項として記述記録も同時に行っている）。その他、対象者によっては、毎回ごとの評価に上下の振幅が著しい時があり、これは対象者の身体状況、精神状況、病気や薬、天候などによって影響を与えられていると考えられる要因が様々にあるとも言えます。

## 〈各施設による報告〉

### 施設A

対象者となっている痴呆性老人は、日常生活では動作や会話も少なく孤立しがですが、療育音楽の時には、会話、表情、目のかがやき、集中力にはつきりと向上がみられています。療育音楽の時間以外での日常生活においては明らかにとは言えませんが、会話や表情に変化がみられる人がでてきています。

### 施設B

20名中10名は毎日昼食前の15分間(11:30~11:45)、歌のみ実施しています。職員と共に集中した関わりが持たため、「歌は大嫌い」といつまで歌わなかった人が歌いだしたり、何事にも興味を示さず音楽でも多分反応しないだろうと思われていた人が、その人なりにグループに加わっている意思表示が見られたことがあって、入居者の新たな発見を見いだすことができました。毎週1時間、入居者とじっくり関わることは、このような機会でなければ日常では不可能であり、しかも他のことではうまくいかないと思われる。そのほか、今まで無言で施設長室を徘徊する入居者が、「こんにちは〇〇さん」とあいさつの歌で施設長に声をかけられ、てれた表情をみせるようになった等、コミュニケーションを密にするようなきっかけがつけられています。

### 施設C

療育音楽のある日は午前中に入浴があり、昼食後の一番眠い時間という悪条件の中、少しずつですが、自己表現ができるようになり、その時間、自分なりの楽しみを見いだしつつあります。普段の生活においては日常の記録をみるかぎり、全体として顕著な変化は表れていません。療育音楽の時間には個人の変化があきらかにみられます。園としてはそれ以上の効果はむしろかきとえています。

### 施設D

笑いがあって、とにかく楽しいので、利用者が楽しみに待っています。療育音楽が生活の中に組み込まれているようです。リズム中心の反復練習について効果があるようで、前の週の練習を覚えている人もでてきています。週1回では少ないのではとの職員の声もあります。今後は、利用者同士のつながりが得られることを目的としながら、評価にとめない指導方針をたてたいと思います。また、各個人の評価について異なる専門分野間で情報交換してゆけるものと思います。

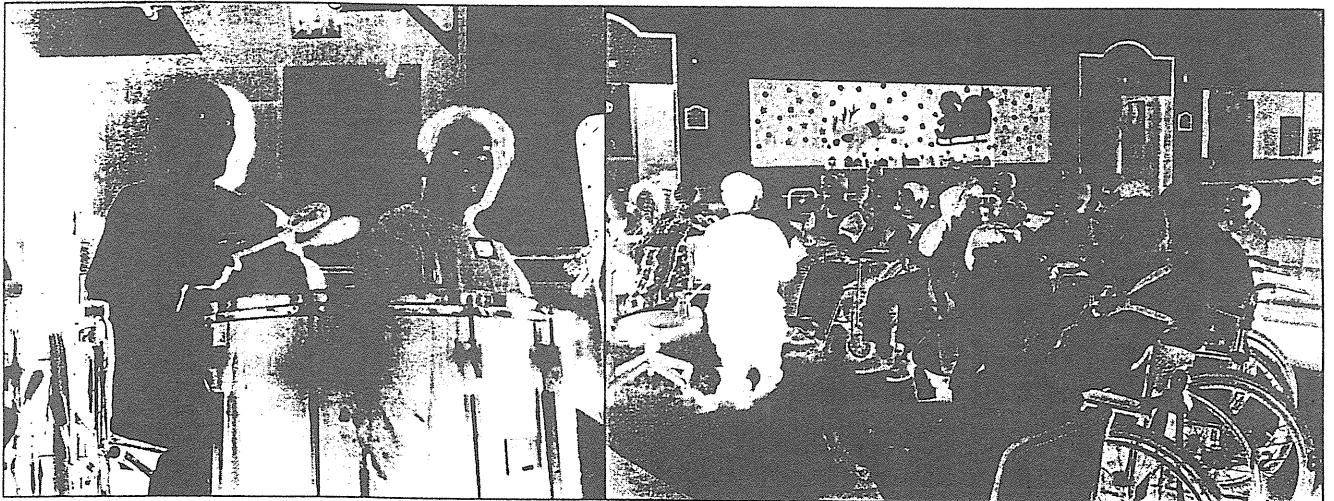
## 〈おわりに〉

療育音楽は、その活動を広い意味での「リハビリテーション」としてとらえていますが、その場合、持続性を持たなければならぬことは言うまでもありません。しかし、意欲や興味関心などにおける精神機能の低下が著しい方

達にとって、継続性を維持することは容易ではないのです。「楽しくなければ」続きません。この点において、事業を実施した4施設とも、療育音楽は「お年寄り自身が楽しめる」活動であると評価しています。

また、プログラム開始前に対象者個人を把握する資料として、療育音楽基本調査を行ったところ、ほとんどの対象者がホームで生活する中では自ら音楽を聞いたり演奏したりすることが全くない、と回答されました。この事業にあたって、毎週1時間このようなプログラムに参加することは、入居者やその方達を介護する施設職員にとっても、1日の生活の流れの中で大きな変化になった

と認識しています。「療育音楽が生活のリズムとなって理解している入居者も出てきた」というような施設側の感想がいくつか出ているように、3ヶ月を過ぎた現在、対象者、指導者、スタッフ間で互いの役割を把握しつつプログラムが定着してきた状況に至っています。



# 埼玉県痴呆性老人処遇向上モデル事業 音楽療法（療育音楽）事業報告 ①

## 1. 事業背景

今、痴呆性老人の急増やその治療と処遇の困難さが強調され、様々な推進事業や具体的な検討が行なわれていますが、殊に重度の方々への対応は特別養護老人ホームなどの施設が最も直面している問題です。今回のモデル施設に、施設でとりいれている諸活動について質問をした結果、離床や個人のQOL、その人らしさを求めた様々な配慮がなされ、音楽に関するもののみ並べても、定期的な時間における有線／館内放送の利用、合奏クラブ、歌体操、音楽あそび、カラオケなど数多くの活動がそれぞれの施設で試みられながら、重度の痴呆性老人は、参加できなかつたり、参加しても対人関係が疎遠になり孤立しがちであるといった報告がされました。平成6年に厚生省による痴呆性老人対策に関する検討会が提案したように、「つくられた痴呆状態にしない発想」を基に、様々な専門分野でネットワークづくりをしながら積極的な社会的事業の実施と今後の課題を前向きに検討することが望まれます。

## 2. 事業目的

この事業はますます重度化される痴呆性老人の日常生活における活動性の低下を防ぐため、その処遇方法の一環として埼玉県の特別養護老人ホーム4施設で療育音楽をモデル的に導入し、その効果や今後の課題を検討するものです。

## 3. 実施施設

施設ABCDの埼玉県の4つの特別養護老人ホーム。

## 4. 実施期間

4施設とも

平成6年9月6日～平成7年3月（7か月）、週1回  
午後1時間。

## 5. 参加者

主に重度の痴呆性老人8名～20名のグループセッション。各施設、担当職員が個人の状態を考慮し、ふさわしいと思われる方を選出。参加人数は以下の通り。

A 男性2名 女性11名 計13名

B 男性4名 女性16名 計20名

C 男性2名 女性6名 計8名

D 男性3名 女性12名 計15名

合計 男性9名 女性44名 計53名

## 6. 実施者

実施監督：赤星建彦

（財）東京ミュージック・ボランティア協会会長

スーパーバイザー：加藤みゆき

全米公認音楽療法士 療育音楽指導者

療育音楽指導者：A 坂元直美 補助者：田中美津子

B 三宅恭子 橋本いづみ

- 実施施設担当者：A 平均3名  
B 平均6名  
C 平均1～2名  
D 平均3名
- C 小林俊恵 佐野幸子  
D 嶋田和子 村田みゆき

- 一指導者のアシスタント
- 一プログラム中の対象者の状況観察
- 一評価記録
- 一ミーティング参加

- ⑤施設実施担当者
- 一療育音楽基本調査と調査表記入
  - 一参加者への個人的対応と観察
  - 一個人の変化記録
  - 一療育音楽指導者とのミーティング
  - 一評価を影響する生活上の出来事など情報提供
  - 一プログラムに対する評価、感想

## 7. 実施者の役割 -----

- ①実施監督
- 一痴呆性老人のための療育音楽プログラムの構成
  - 一評価内容の設定と指示
  - 一プログラムのデモンストレーションと対象者の初見
  - 一スーパーバイザーとのミーティングによる事業経過の把握
  - 一療育音楽指導者の指導技術についてアドバイス
- ②スーパーバイザー
- 一事業概要、基本調査、記録表、評価表など資料作成
  - 一評価項目における検討と評価方法についてのアドバイス
  - 一毎月1回のビデオ記録と観察、ミーティング参加(実施状況、対象者の把握と問題点などの検討)
  - 一補欠指導
  - 一中間報告、最終報告のまとめ
- ③療育音楽指導者
- 一対象者の把握
  - 一毎回の指導計画と指導、プログラム中の対象者の状況観察
  - 一施設職員とのミーティング
  - 一活動記録/個人評価記録
  - 一各対象者のデータ、個人事例、指導状況の報告
- ④補助者

## 8. 事業実施計画 -----

- ①療育音楽事業概要
- ・事業の目的、事業経過、実施内容を県、施設へ報告
- ②施設指導事前訪問
- ・療育音楽プログラム依頼要請書、指導事前資料(表1)の活用と施設方針、事業に対する意向など把握
- ③療育音楽基本調査
- ・対象者の状態、特徴、関わる上での留意点を把握(表2)
- ④評価対象者と目標
- ・各施設職員と指導者の話し合いにより評価人数の設定と評価対象者を任意抽出
  - ・痴呆性老人に対する療育音楽評価表活用(HHM242号P6参照)
- ⑤プログラムの実施
- ・(HHM242号P5参照)
  - ・活動記録表活用(表3)/毎回のプログラムの予定や反省に役立て、個人の特記事項を記入
  - ・ミーティング毎回実施(個人評価、指導の課題等)

表1

表2

表3

《指導者施設事前資料》

交通手段	
交通費	課税の別あり
レッスン場所・広さ	
在庫楽器・機種・数・使用の可能性	購入予定楽器/教材
今までの音楽状況・活動記録	
プログラムにあたっての希望・目的	
写真・ビデオ撮影	可 不可 (署名)

療育音楽基本調査表

記入日 年 月 日

記入者

施設名又は住所																					
氏名	男・女	生	年	月	日	入所	年	月	日												
疾患名						A D L															
障害部位							聴覚/聴覚/聴覚														
視力	盲・準盲・弱視・問題なし																				
聴力	聾・高度難聴・中度・軽度・問題なし																				
移動	独歩・介助歩行・車椅子																				
言語理解	判断不可・あまり理解できない・時々理解・ほぼ理解できる・問題なし																				
言語表現	判断不可・身振り・発声・単語・2～3語文・ゆっくり会話・普通に会話																				
特徴(顔・話・行動)																					
留意点																					
日常生活状況	<table border="0"> <tr> <td>参加意欲</td> <td>0</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td> </tr> <tr> <td></td> <td>参加意欲がない</td><td>参加しない事が多い</td><td>時々参加</td><td>促せば参加</td><td>自主的に参加</td> </tr> </table>									参加意欲	0	1	2	3	4		参加意欲がない	参加しない事が多い	時々参加	促せば参加	自主的に参加
参加意欲	0	1	2	3	4																
	参加意欲がない	参加しない事が多い	時々参加	促せば参加	自主的に参加																
興味関心に対する状況	<table border="0"> <tr> <td>興味関心</td> <td>全く関心を示さない</td><td>関心を示さない事が多い</td><td>時々関心を示す</td><td>関心のあることには関心する</td><td>新しいことに挑戦する</td> </tr> </table>									興味関心	全く関心を示さない	関心を示さない事が多い	時々関心を示す	関心のあることには関心する	新しいことに挑戦する						
興味関心	全く関心を示さない	関心を示さない事が多い	時々関心を示す	関心のあることには関心する	新しいことに挑戦する																
社交性	<table border="0"> <tr> <td>社交性</td> <td>交流できない</td><td>時々応答する</td><td>応答程度</td><td>特定の人であれば自ら人と交流する</td><td>交流する</td> </tr> </table>									社交性	交流できない	時々応答する	応答程度	特定の人であれば自ら人と交流する	交流する						
社交性	交流できない	時々応答する	応答程度	特定の人であれば自ら人と交流する	交流する																
音楽背景	1. 音楽は好きな方である・まあまあ・どちらとも言いえない 2. これまでの音楽経験 ( ) 3.好きな音楽の種類 ( ) 4.好きな曲/思い出の曲 ( ) 5. 音楽、個人で音楽を聞いている時が 全くない・まれである・時々ある・多い 6. " " 楽器を演奏している時が 全くない・まれである・時々ある・多い																				

参加者名

活動記録表

日時	19 年 月 日	曜日/時間	～
指導者	天気		
担当	ボランティア 見学		
参加者	スズ( ) カスタ( ) タンバ( ) トライ( ) ドラム( ) メロディー( ) その他 男 名 女 名 社 名		
導入 挨拶			
歌			
演奏			
RIT			
さよなら			
個人状況			
その他			





# 埼玉県痴呆性老人処遇向上モデル事業 音楽療法（療育音楽）事業報告 ②

## 10. 実施内容

プログラムは毎週1回1時間。  
プログラムの流れはHHM242号P5を参照。

### 【プログラム背景（療育音楽の目的と効果）】

療育音楽とは、財東京ミュージック・ボランティア協会会長、赤星建彦によって提唱されたプログラムで、痴呆性老人に対しては残存機能を有効に生かし、懐かしい歌を通して記憶の糸をひもときながら、グループの中で楽しく活動的に過ごすことのできるような心身のリハビリテーションを目的とし、お年寄りの身体機能、難聴問題を考慮し改良された楽器、機材を使って、よりお年寄りが自らの意欲で参加できるような指導法のもとに行われる活動的音楽療法として実践を積み重ねてきました。

### 【プログラムの理念】

① 脳の活性化  
脳の神経細胞の最も多くは手につながっていることから、手を有効に使うことで脳を活性化します。

② 呼吸器の強化  
適切な酸素のとり入れ、炭酸ガスの排出は内臓機能を刺激します。大きな声でうたうことで呼吸機能の強化につとめます。

③ リズム感の復活  
人間の身体機能、生活はすべてリズムと共に営まれています。リズムを失ったときに何らかの障害がおきることから、リズム感を養成することで健康的な生活につなげます。

### 【関連する痴呆性老人の問題】

① 独立した指の動きがにぶくなったり、手首の柔軟性が保てなくなることで、自分の身体を支える力が弱まったり、食事の困難をひきおこします。

② 寝たきりや消極的な活動によって、肺機能の低下や咽喉の知覚低下がすすみ痰をうまくきれなかつたり、のみこみの障害をひきおこします。

③ 生活のリズムを失うことによって、転倒をひきおこしやすくなったり、夜間の徘徊がみられます。

### 【療育音楽プログラムの工夫】

① 高齢者のための楽器の選択、またそれらの楽器を利用して身体機能の維持や手首の柔軟性が保てるような簡単な身体動作を促しています。

② 最も楽しく歌いやすい状況をつくるために、痴呆性老人のための曲の選択、声域にあわせたキー、テンポ、難聴対策として低音の強化など考慮しています。

③ プログラムを行なう時間帯を考慮し、手やリズムシエーカー、太鼓をうまく利用して歌いながらリズムがとれるようになることを促したり、くりかえしの刺激によって習慣づけることを重視しています。

以上のことを主に考慮している療育音楽プログラムは、医師など医療関係者によるアドバイスをもとに継続して行なわれ、多くの施設から臨床事例が報告されています。

## 11. 評価方法

目的：療育音楽のプログラムが、老人ホームで生活する痴呆性老人の身体的、精神的、社会的活動にどのような影響を与えるのか評価することを目的として以下のことを検討しました。

①痴呆性老人の特徴的にみられる精神機能（主に参加意欲、集中力、表情）において向上がみられるかどうか

②集団で行なわれる活動の中での役割（主に興味関心、社交性、自主性）において向上がみられるかどうか

評価対象者：施設A 男性1名 女性7名 計8名  
B 男性3名 女性3名 計6名  
C 男性2名 女性6名 計8名  
D 男性2名 女性10名 計12名  
合計：男性8名 女性26名 計34名

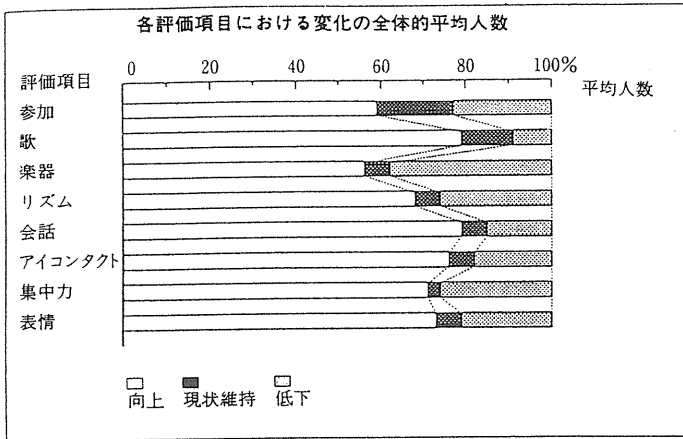
評価方法：毎回レッスン終了後、ミーティングを設け、痴呆性老人のための療育音楽評価表を用いながら、個人の参加状態を評価、特記。

## 12. 結果

### ①各評価項目における変化の割合

記録20回中の評価A～Dを4～1と点数化し、評価をとり始めてから4回の平均を初期の評価とし、最終4回の平均をその後の変化として比較しました。その結果、評

価8項目における変化の平均は70%の向上、8%の現状維持、22%の低下を示しています。



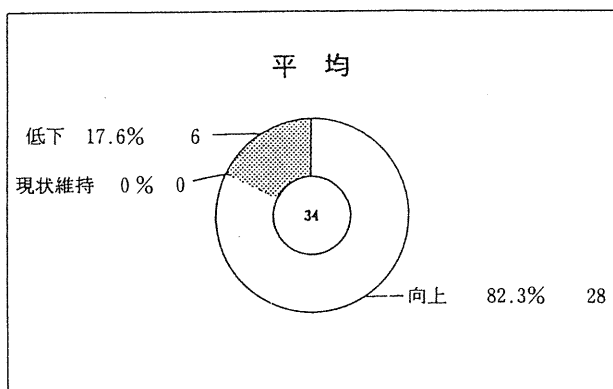
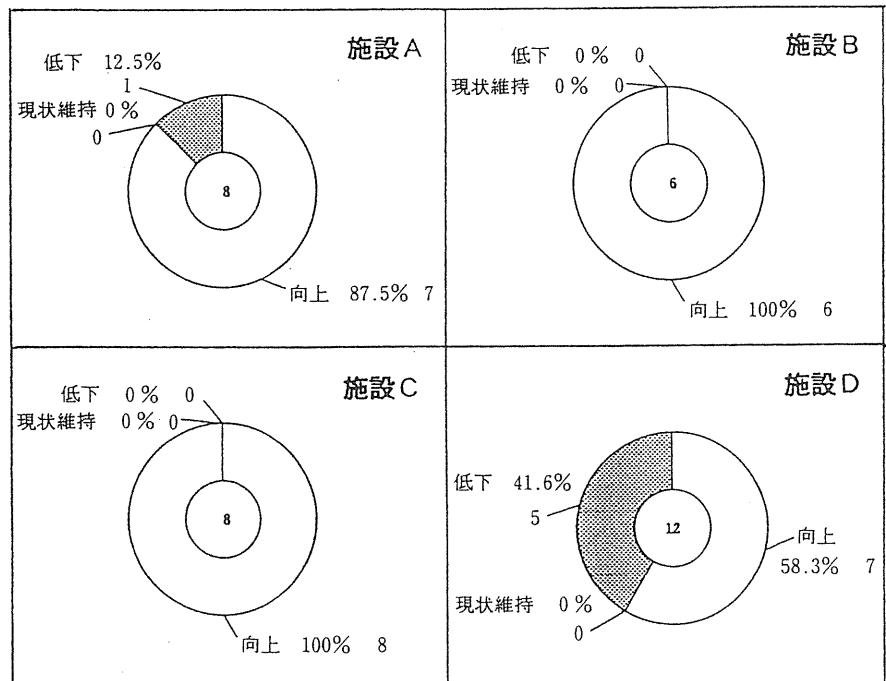
施設別各項目における変化

		参加	歌	楽器	リズム	会話	アイコンタクト	集中力	表情
施設 A	向上	62.5%	87.5%	62.5%	50%	100%	87.5%	62.5%	62.5%
	現状維持	12.5%	12.5%	12.5%	25%	0%	0%	25%	12.5%
	低下	25%	0%	25%	25%	0%	12.5%	12.5%	25%
施設 B	向上	33.3%	50%	16.7%	66.6%	66.6%	66.6%	83.3%	100%
	現状維持	33.3%	16.7%	16.7%	0%	33.3%	33.3%	0%	0%
	低下	33.3%	33.3%	66.6%	33.3%	0%	0%	16.7%	0%
施設 C	向上	87.5%	87.5%	87.5%	100%	87.5%	87.5%	87.5%	100%
	現状維持	12.5%	12.5%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	低下	0%	0%	12.5%	0%	0%	12.5%	12.5%	0%
施設 D	向上	50%	83.3%	50%	58.3%	66.7%	66.7%	58.3%	75%
	現状維持	15.7%	8.3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	低下	33.3%	8.3%	50%	41.6%	33.3%	33.3%	41.6%	25%
各項目平均	向上	59%	79%	56%	68%	79%	76%	71%	73%
	現状維持	18%	12%	6%	6%	6%	6%	3%	6%
	低下	23%	9%	38%	26%	15%	18%	26%	21%

### ②総合変化の割合

各8項目の評価を合計し総合的な変化としてグループ活動における自主性や興味関心を比較したところ、評価対象者34名中、約82% (28名)に向上がみられ、18% (6名)について低下がみられました。低下を示す要因とみられる生活状況の変化には、体調悪化、転倒、居室がえが上げられています。施設別にみると、施設B、施設Cの対象者すべてにおいてある程度の向上がみられ、施設Aは、87.5%、施設Dは58.3%の対象者において向上がみられました。

施設別総合変化の割合



③ 評価の傾向

20回中の項目別平均人数を施設ごとにまとめ、その傾向を調べました。主な結果として、

- 参加については4施設ともBの「促せば参加する」に評価が集中しました。独立歩行の可能な方が対象者にいる場合は「自ら参加する」結果にもなりました。
- 歌については4施設とも評価が分散していることから、対象者の個人差が大きく関与していると読み取

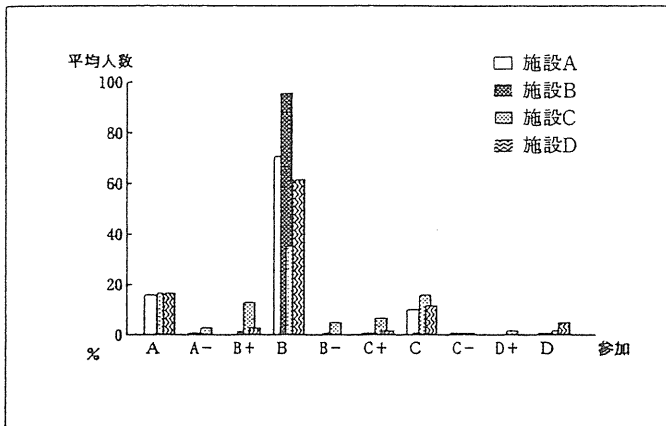
れます。

- 総合変化に低下がみられた対象者を持つ施設Aと施設Dは、施設Bと施設Cより比較的どの評価項目においてもB以上の高い評価が多く示されました。

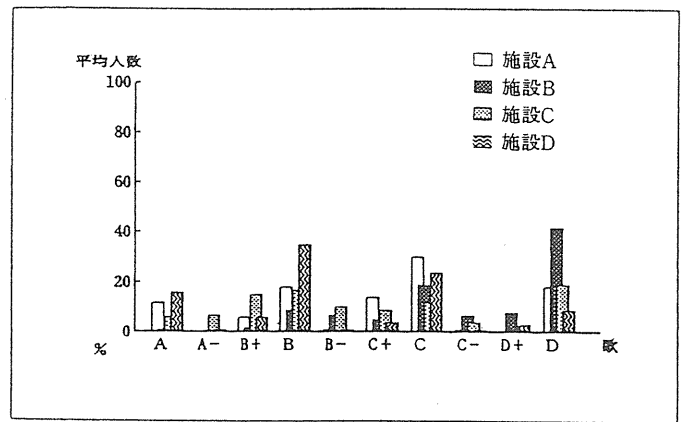
尚この結果は、対象者4名について異なった評価基準が定められたため、対象者30名についての傾向を示しました。

施設別評価の傾向

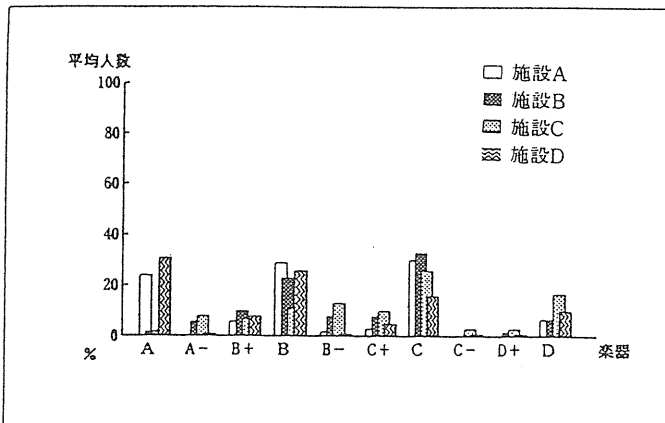
① 参加



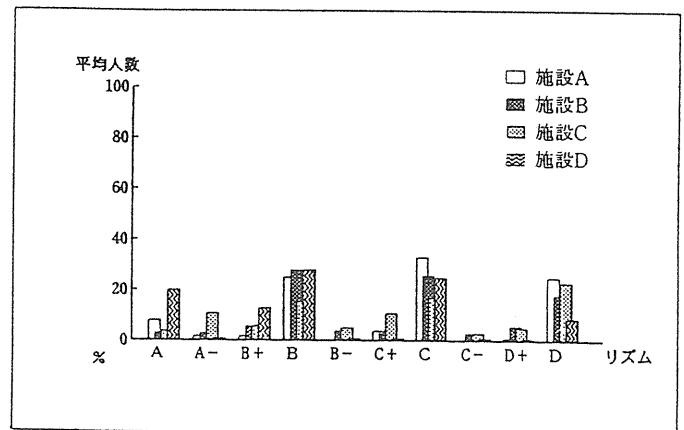
② 歌



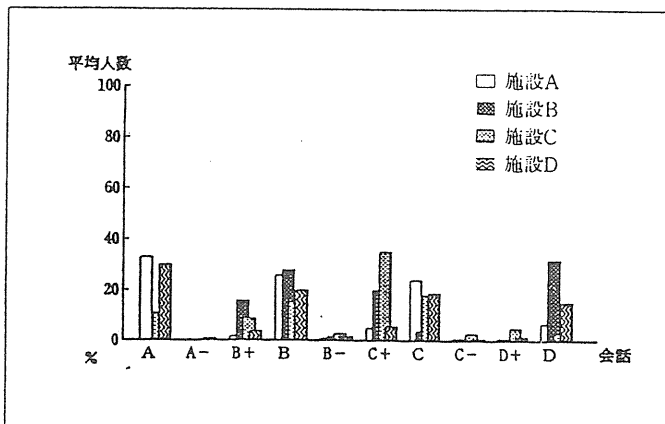
③ 楽器



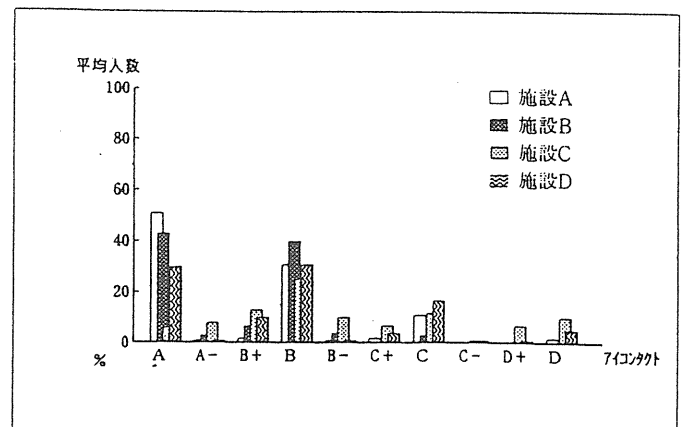
④ リズム



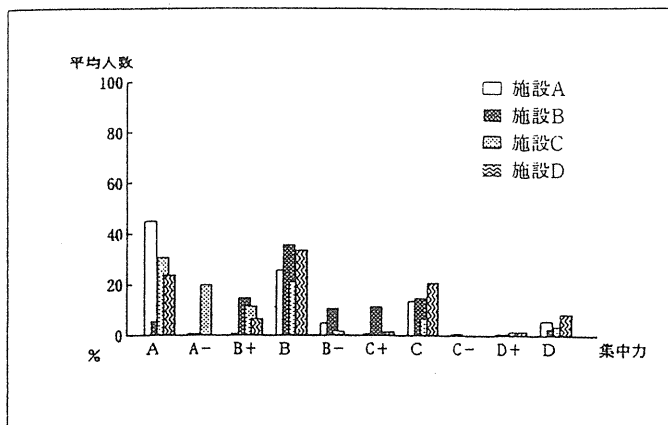
⑤ 会話



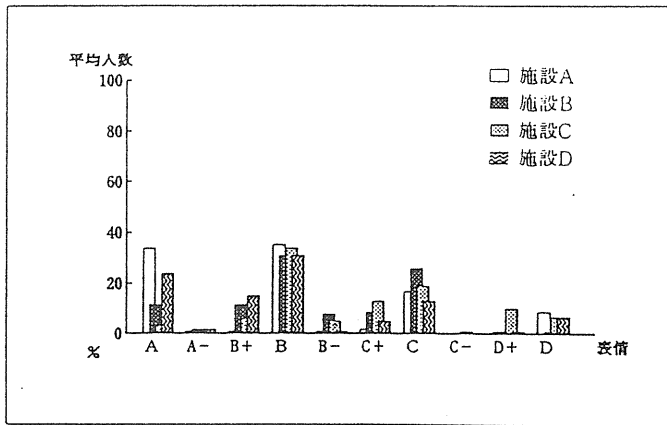
⑥ アイコンタクト



### ⑦ 集中力



### ⑧ 表情



### ④施設報告による結果

- 毎週1時間の車椅子から椅子への離床が可能となった。
- 状況の把握ができるようになり、音楽をする生活のリズムに慣れた。
- 言語表現、感情表現が増えた。
- 集中力が持続できた。
- プログラムで使われた曲を、日常生活場面でコミュニケーションをはかる手段として応用することができた。

- 入居者とじっくり関わりを持てた。
- 普段の生活ではみられないお年寄りの可能性を見いだせた。
- お年寄りどうしの交流がプログラムの中で活発にみられた。
- 入居者の楽しみとなっている。
- 系統だてられたプログラムのノウハウを理解できた。
- 文化祭での発表など地域へ参加するきっかけが持てた。

## 13. 考察

### ①参加意欲について

療育音楽プログラムにおける参加の向上は59%と、中間報告時点の55%から比較してもあまり変化はみられません。これは痴呆性老人の多くの方々が自己主張されることが少ないということが理由のひとつと考えられます。けれども、基本調査表の参加意欲における評価とこのプログラムに対する評価を比較すると、調査では対象者の65%が「促せば参加する」と示されましたが、プログラムに対しては19%高い84%の対象者が「促せば参加する」以上の結果を示しました。このうち「自ら参加する」と評価された人は調査段階では0%であったのに対し、療育音楽においては12%を示しました。今後、重度の痴呆性老人の方でも促せば参加できる活動の取り組み方を考えられる要素であると思われます。実際、「やらない」と言ったり、プログラム直前まで不機嫌にしていた方々が、プログラム中、自ら活動的に参加したり機嫌のよくなった状況が度々観察されました。

### ②集中力について

中間報告時点で最も向上がみられた項目で、最終報告時点でも引き続き、全体の70%が、1時間のプログラム中40分以上集中して参加（うち26%が1時間中ずっと）を示す結果となりました。他の項目より、比較的早い時

期に向上し、また持続できたことから、対象者にとって、興味関心を持ちやすいプログラムであったと言えるでしょう。

### ③表情について

中間報告時点では49%と向上を示す割合が他の項目より低く、最終報告時点で73%の向上がみられるようになり、数値の上では変化がみられるのに時間を要するようには思われますが、どの施設からも全体的な効果としてプログラムにおける表情面での変化が最も多く報告されています。これは音楽による効果というよりもはるかに「関わる」程度の深さによるものではないかと考えます。ある施設からは、職員が入居者とじっくり関わりができるのは、このような機会でなければ日常では不可能で、しかも他のことではうまくいかないのではないかと報告を受けました。

### ④会話について

施設によって、それぞれ評価の高い割合を示す傾向が様々であったことから、指導者のプログラムのすすめ方、言葉かけの度合いや方法によって違いがみられたのではないかと考えます。同時に、歌での参加に向上がみられたように、発声面での効果も影響していると報告されました。